

# 豊かな体験活動を活かした「環境」の学習

— 第3学年 太田川探検隊「太田川をさかのぼってみよう」の実践を通して—

佐藤 健

## 1 はじめに

冒頭で述べているように、「環境領域」における中学年のねらいは次のとおりである。

- ・めあてを持って、身の回りの環境について調べることができる。
- ・自然の変化やサイクルを豊かに感じとることができる。

上記のねらいを受けて、第3学年では次のような「めざす子ども像」を設定した。

### めざす子ども像

- ・水とそれを取り巻く自然の変化やサイクルを豊かに感じとることができる子ども
- ・水を中心とした身近な環境に関心を持ち、自ら進んで調べたり関わったりすることができる子ども

第3学年ではこの2つのねらいの中で、特に「自然の変化やサイクルを豊かに感じとること」を大切にしていきたい。本校の総合的な学習は緒に就いたばかりで、「環境領域」のねらいに迫るためには、前研究テーマである「豊かな感性を育む」の延長として「身近な自然を豊かに感じる」ことが重要と捉えたからである。そうすることで、第4学年での「めあてを持って、身の回りの環境について調べることができる」というねらいにも迫っていくことができる。そのためには、実際の活動体験が大きなウェイトをしめる。その活動の質が実践の成果を左右すると言っても過言ではあるまい。

本稿では、今年度の研究テーマ「自立に向かう子どもたち」と照らし合わせたうえで、どのような活動を取り入れ実践することがより有効であるのかを明らかにしていきたい。

## 2 研究の視点

### (1) 前研究テーマとの関わり

本校はこれまで、感性に視点をあてて研究してきた。そこでは、感性を次のように捉えている<sup>1)</sup>。

感性は、外界からの刺激に対する敏感さをもとに価値あるものに気づく感覚であり、価値あるもの（知的・倫理的・宗教的・芸術的・表現美的）を求める働きを促すものである。

この視点から見えていくと、「環境領域」における感性の重要性が明らかとなる。具体的な活動や体験の重視が叫ばれて久しいが、「環境領域」においてこそ、豊かな体験活動を積極的に取り入れる必要がある。校外の環境に直接的に関わることで、子どもたちは豊かな感性に根ざした学習を展開できるからである。そこで、実践にあたっては、まず、子どもたちの感性を揺り動かす、豊かな体験活動を取り入れることを大切にしていきたい。そうすることで、子どもたちは、身近な地域の環境を通して、多様な気づきをもつことができるであろう。

### (2) 研究テーマとの関わり

現在の研究テーマは、「自立に向かう子どもたち」である。本年度は「自分で決める場を大切に」をサブテーマとしている。では、「環境領域」に何が求められているのであろうか。

「自分で決める」ためには、子どもたちが学習の見通しをもっていることが前提である。これか

らの学習の見通しがあるからこそ、想いを巡らせ、自分の考えをもつことができる。そのことが、自分なりのこだわりをもち、自己決定を促す学習を保障する。

以上のことから、実践にあたっては、次の2点を大切にしていきたい。

- ◎ 多様な体験活動を取り入れ、児童の豊かな気づきを引き出すようにする。
- ◎ 学習に見通しをもったうえで、一人ひとりが自分なりの想いを活かし、決めていくことのできる場を大切にする。

### 3 実践事例 ー太田川探検隊「太田川をさかのぼってみよう」(第3学年)

#### (1) 単元の概要

##### ① 太田川探検隊について

児童は低学年での生活科を土台として、社会科の校外学習、理科の観察で様々な身の回りの環境とふれあってきた。しかし、本学級の児童は広島市およびその周辺の市街地に住んでいるため、豊かな自然とのふれあいは十分とは言えない。「水」に関する事前の調査から、児童は「川」「海」「湖」といった自然に関わる言葉をイメージしていることが明らかとなった。しかし「水道」「プール」といった人工のものをイメージする子どもも少なくない。また、自然の川で遊んだ経験はほぼ全員がもっているが、本校のすぐ横を流れる太田川の支流の猿猴川に入り、体を通して遊んだことのある児童は2人しかいない。

水都広島を代表する川は太田川である。総延長103kmに及ぶ河川は、上流から下流に流れていくにつれ、次のような表情を見せる。

- 上流ー美しい溪谷には様々な生命が息づいている。ダム建設など開発が進んでいる地域でもある。
- 中流ー川幅が広くなり、市民の手軽なレクリエーションの場となっている。
- 下流ー親水公園など市民の潤いの場であるが、排水の流入による水質の悪化が顕著な所でもある。

このような表情を見せる太田川は、児童にとって身近な環境であるだけでなく、多様な環境への扉を開く可能性をもつもので、軸教材として有効といえる。

導入にあたっては、猿猴川の探検活動から入る。その活動を通して、児童は身近な太田川に目を向けることができるであろう。また、その活動を発展させ、「猿猴川の上流はどうなっているのだろうか?」と問いかけることで、源流から海へと至る水の循環に気づくことができるようにしたい。上流での活動の「太田川探検隊」では、上流の豊かな自然に直接ふれあうことで、児童一人ひとりが自分なりの気づきやこだわりをもてるようにしていきたい。さらに、単元のまとめでは、一人ひとりの想いを活かせるように、様々な表現活動を取り入れ、これからの太田川のあり方や関わり方を模索できるようにしたい。

##### ② 活動内容と計画.....全22時間

猿猴川探検に出発 (4時間)	太田川をさかのぼってみよう (13時間)		「わたしたちの太田川」 (5時間)	
<b>【動機づけの体験活動】</b> 猿猴川探検に行こう。 カニ・ヤドカリの採集、泥遊び、船遊び、魚釣りなど	<b>【体験活動】</b> いざ、太田川探検隊出発！ 水遊び(川渡り、石切り)、船遊び、岩場下り、魚・カニ・貝とり、魚釣り、スケッチ、石集め、砂の造形、ボール遊び、水鉄砲 など	<b>【ふりかえりと表現活動】</b> 探検の報告会をしよう。 テーマを決めて「こだわり発表会」をしよう。	<b>【話し合い活動・準備】</b> 「太田川そう合発表会」の計画を立て、準備をしよう。	<b>【総合発表会】</b> ・友だちをしょうたいして「太田川そう合発表会」を開こう。

## (2) 実践の概要

### ① 猴候川探検に出発

10月23日－晴れ。「猴候川探検隊」出発当日。事前の話し合い活動で、子どもたちは、次のような活動を考えていた。

カニ・ヤドカリの採集、泥遊び、船遊び、魚釣り

当日は干潮ながらも小潮のため、干潟は川幅の4分の1程度しか表れなかったが、足には長靴、手にはそれぞれ自慢の道具を持って、河原に降り立った。始めはたくさんの打ち上げられたクラゲや潮の香りにやや氣勢をそがれた場面もあったが、すぐさま川の中に入り込み、想い想いの活動に没頭している姿が印象的であった。カニやヤドカリを見つけ集める子、つり竿を準備し大物をねらう子、膝まで水に浸かり川の中を散歩する子、泥を掘り迷路を作る子など、様々な活動に没頭していた。

しかし、困った場面に出会ってしまうことも多々あった。川の中でサンダルをなくしてしまう子、落ちていたガラスで足を切ってしまう子、釣り針にごみのジーンズをひっかけててしまう子、転げて服をどろどろにってしまう子などなど。

教室から飛び出し、猴候川で生き生きと活動することができた。

### ② 太田川をさかのぼってみよう

11月7日－快晴。待ちに待った「太田川探検隊」の当日。暦の上では立冬を迎えていたが、当日は小春日和。JR可部線に揺られて約1時間半。太田川上流の加計駅に到着した。子どもたちには事前に加計駅周辺の太田川の様子をVTRで見せていたので、「あっ、ジャンボ岩だ。」「ビデオと同じ所だね。」と到着と同時に興奮気味であった。

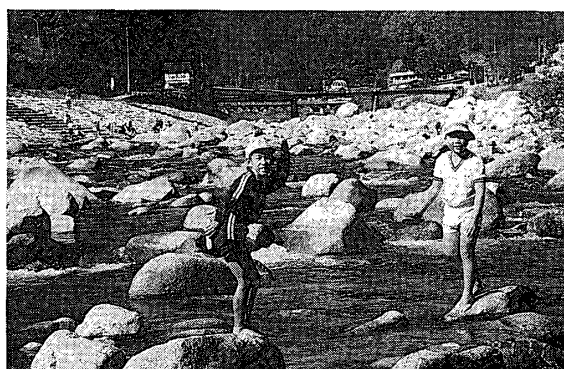
探検の当日は教育実習中ということもあり、実習生1名が1グループを担当することとした。猴候川の水質との違いに子どもたちはすぐに気づいた。11月にもかかわらず、すぐに水着に着替える子も数名。諸注意を聞いた後、子どもたちは水の中に入り込んでいった。子どもたちがもっとも熱中していたのは川渡り。飛び石伝いにどんどんと川の中州に向けて渡っていく。中には、スケッチに集中したり、魚すくいや石集めに熱中したりと様々な活動を展開していた。



〈カニの穴はどうなってるの〉



〈先生の先生とジャンボ岩の前で〉



〈ぼくが川渡りチャンピオン!〉

帰りの車内で、「先生、また行きたいね。」「今度は、夏に行ってみようよ。」と期待に胸を膨らませて話す児童が多くいた。この日の子どもたちの活動例は次の通りである。

水遊び（川渡り、石で水切り）、船遊び、水中かんさつ、ジャンボ岩探検、魚・カニ・貝とり、スケッチ、石集め、砂の造形、ボール遊び、水鉄砲、水を飲む、カメラで記録する、ごみ集め

太田川探検後の報告会は、下表にあるように、自分でテーマを決め、テーマごとにグループを作り新聞を作成することとなった。学級内で「こだわり発表会」を行い、気づきの交流を図った。

おすすめマップ……………	8名	行き帰りの様子……………	6名
?のこと（瀬と淵）……………	5名	生き物のしょうかい……………	4名
上手な川のわたり方……………	4名	きらり・ぼろり発見隊……………	3名
びっくり発見……………	3名	ジャンボ岩探検隊……………	3名

### ③ わたしたちの太田川

研究会で公開した本時の活動計画案は以下の通りである。

わたしたちの太田川		1 / 5 時間
<p>○これまでにいろいろな発表をしたね。 (前時までの発表資料の提示)</p> <p>○まとめの「そう合発表会」をしよう。</p>	<p style="text-align: center;">前時までの学習を想起する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・森とのつながりを発表したよ。</li> <li>・生き物を発表したね。</li> <li>・川の石を集めて作品にしたよ。</li> <li>・川での遊びを紹介したよ。 など</li> </ul> <p style="text-align: center;">本時のめあてを把握する。</p>	
<p>「わたしたちの太田川」そう合発表会をしよう！</p>		
<p>○どんな発表がしてみたいかな。</p> <p>○どの方法で発表したいかな。</p>	<p style="text-align: center;">発表方法を出し合う。</p> <p>◎発表方法に思いをめぐらせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・太田川のポスターを作りたいな。</li> <li>・詩を作って詩集にしたいな。</li> <li>・紙芝居にするのもいいね。</li> <li>・劇にしたらいいよ。 など</li> </ul> <p style="text-align: center;">発表方法を決定する。</p> <p>◎意欲的に発表方法を決定する。</p>	<p>○これまでのいろいろな学習を生かして発表できるといいね。</p> <p>○自分がやってみたい方法がいいよ。</p>
<p>○発表会のためにどんな準備があるかな。</p>	<p style="text-align: center;">本時のまとめをする。</p> <p>◎活動への見通しをもつ。</p>	<p>○これまでの準備を思い出してみよう。</p>
<p>○水の旅を紙しばいにしようよ。</p>	<p>○川の様子を劇にしたいな。</p>	<p>○水を守るポスターを作ろうよ。</p>
	<p>○川を詩で作ってみんなで詩集にしようよ。</p>	
<p><b>目標</b></p>	<p>太田川探検隊での活動を生かし、自分の興味・関心に合った発表方法を決定し、活動の見通しをもつことができる。</p>	

【注】 ◎期待する子どもの姿      ・予想される児童の反応      ○教師の働きかけ

導入は、猴候川と太田川探検の想起とした。黒板にそれぞれの活動の様子を写真で提示し、どのような活動をしたのか問いかけた。

様々な活動を想起したあとで、「2組の友だちをしょうたいして、太田川そう合発表会をしよう」と課題を確認した。「これまでのいろいろな学習を生かして発表できるといいね」と指示したため、子どもたちは思い思いの表現方法をノートに記入していった。それぞれの児童の興味関心にそった提案が予想以上に出された。中には少数ながら、「太田川の歌」「ジャンボ岩の大きさしらべ」のように、自分のこだわりを大切にしたい発表方法が出された。

本時の学習で児童が最終的に自己決定した表現方法と人数は下表の通りである。

魚・生き物調べ	6名
太田川クイズで発表	6名
感想の作文	5名
パワーアップ新聞づくり	5名
紙しばいづくり	4名
「太田川の詩集」づくり	4名
岩のわり方のしょうかい	3名
「太田川の歌」をつくる	2名
ジャンボ岩の大きさしらべ	1名



〈紙芝居で発表するよ〉

子どもたちはそれぞれのこだわりを大切に、発表会の準備に取りかかった。発表会当日は2組を招待し、盛会の内に終えることができた。

#### 4 実践の分析と考察

##### (1) 豊かな体験活動の取り入れ

猴候川探検隊での子どもたちの感想を要約すると、以下の通りである。本校のすぐとなりを流れている猴候川であるが、実際に河原に降り立ったのは初めてという児童が大半であったため、様々な気づきや疑問をもつことができたことが分かる。

##### 【猴候川探検での感想】

###### 【楽しかったこと、新しく発見したこと】

○たくさん生き物(カニ、ヤドカリ、シャコ、カキ、イトマキ貝、ミニホラ貝、白サギ、クラゲ、ハゼ)がいた。○カニを見つけた。○カニのあながたくさんあった。○カニがはさみを口にもっていった。○かわいいエビがいた。○クラゲやハゼがいた。クラゲはスライムみたいだった。○川の中に入った。冷たかった。○沈んでいる船があった。○カキやいろんな貝がいた。○カキの中に身があった。

###### 【困ったこと・いやだったこと】

●思ったよりきたない。●カニが死んでしまった。●クラゲがたくさん死んでいた。●ボラの死体がういていた。●ごみ(まん画、空き缶、ペットボトル、びん、ビニール袋、ボール、時計、船の模型、くつ、弁当、プリン、自転車、新聞、コード、コイン、牛乳パック、バイク、ビデオテープ、携帯電話、くつ下、1円玉、食べかす)がたくさんあった。●足がうまって歩きにくかった。●服や長ぐつがどろどろによごれた。●けがをした。

###### 【疑問に思ったこと】

◇なぜ、あんなにごみがあるの？ ◇死んでいたボラの目はどうなったの？ ◇なぜ、川の土は黒いの？  
◇なぜ、人が少ないの？

猴候川探検後に、「太田川探検でやってみたいこと」を尋ねると次のような子どもらしい様々な活動が提案された。「ジャンボ岩に名前を書く」など、話し合いで消去されたものもあり、実際にはp. 252に示すように、16種類の活動となったが、猴候川探検が活かされた形で、子どもたちの思いが広がっていることを示している。

-----【太田川探検でやってみたいこと】-----

- 水に関すること
  - ・水につかる
  - ・水を飲む
  - ・水を持って帰る
  - ・流れる水の速さ方向を調べる
- 生き物に関すること
  - ・魚をとる（つり、手づかみ、網ですくう）
  - ・リリースする
  - ・水の生き物を調べる
- 遊びに関すること
  - ・船遊び（川流し、笹舟）
  - ・チームで水鉄砲遊び
  - ・石の水切り
  - ・石でまと当て
  - ・砂利のある所でワイルドミニ四駆をする
  - ・グラウンドでみんなで遊ぶ
- ジャンボ岩に関すること
  - ・ジャンボ岩の探検
  - ・ジャンボ岩に旗をつける
  - ・ジャンボ岩の大きさを調べる
  - ・ジャンボ岩に名前を書く
- その他
  - ・ごみ集め
  - ・流木を集めてハンドクラフトをする
  - ・カメラで様子を記録する
  - ・スケッチ
  - ・工作の材料の石集め
  - ・すきな石に名前をつける
  - ・秋見つけ
  - ・もみじを集めてしおりにする

これらのことから、下流と上流の2つの体験活動を取り入れたことが、豊かな感性を育て、児童の気づきを引き出すうえで有効であったと言える。

## (2) 自己決定の場の保障

本実践では、子どもの想いを活かした展開を重視した。具体的には、探検での活動内容を決める場、探検したことを発表する場での自己決定という形で取り入れた。

探検場面での活動の決定はスムーズになされた。猴候川の探検をもとに、自分なりの想いを活かし、活動を広げることができた。

また、太田川探検隊後の「こだわり発表会」、まとめの「太田川そう合発表会」での発表場面では、子どもたち一人ひとりが自分のこだわりや想いを活かし、発表内容や方法を自己決定する姿が見られた。例えば、ジャンボ岩の探検に出かけたある児童は、「こだわり発表会」で「ジャンボ岩新聞」をつくり、その後の「そう合発表会」でも、一人ジャンボ岩にこだわった。模型をつくり、大きさを予想し、ジャンボ岩の魅力を発表していた。また、音楽に興味をもっている児童は、自分たちで作詞、作曲をし、みんなの前で、堂々と発表することができた。

今回の学習を通して、筆者は支援する立場を明確にとったため、子どもたちは自分たちの想いを活かし、活動内容を自己決定して学習を進めることができたと考える。

## 5 おわりに

本実践は、全くの手探り状態でスタートした。これまでの低学年での「環境領域」の積み重ねがないところでの出発であったため、猴候川探検を導入として取りあげた。上流と下流との2つの体験活動を取り入れることで比較が容易にできたため、子どもたちは多くの気づきや自分たちなりのこだわりをもって学習を進めることができた。そして、何より、子どもたちは「環境」の学習を心から楽しみにしていた。これらのことが大きな成果として挙げられる。

しかし、残された課題も多い。そのいくつかを箇条書きにする。

- ◇ 時数の関係から往復3時間かかる太田川上流での探検活動の有効性は十分検証されたか。
- ◇ 今回の学習を、第4学年での「太田川探検隊PARTII」の学習へどう発展させていくか。
- ◇ 「自然の変化やサイクルを豊かに感じとる」ための、体験活動の時期をどう設定するか。今後は、実践を通して、これらの課題を明らかにしていきたい。

### <引用文献>

- 1) 広島大学附属東雲小学校平成7年度研究紀要「豊かな感性を育む」、山脇印刷、1996、p. 24.